

# 二つの掌

真織

例えば私が猫だったら。そんな風に考える。仕事に追われる毎日に、恵美はとても疲れていた。

一年前。リクルートスーツを身に纏って、就職活動という人生の岐路に立っていたのが、つい最近のように感じる。

コンビニを出ると、まだ小さな猫が目の前を颯爽と横切った。暗闇の中に光る目は、獲物を見つけたときのようにキラキラと輝いているように見えた。色は白に少しだけ茶色が混ざったような、どこにでもいるような雑種。そしてそいつは、一目で分かるようなリクルートスーツを着た学生の元へ、一目散に駆けて行った。

一部始終を見守ると、恵美はふうっと小さくため息をついた。時計に目をやる。今日もどうか日付を超える寸前に、家に着くことが出来そうだ。

念願の広告代理店に就職して三ヶ月が過ぎた。リクルート企業は憧れだった。いつかのテレビで、きちっとしたスーツを着こなす営業ウーマンの特集を見て、私もいつかこうなろうと漠然と描いてしまった憧れ。それが間違いだって気付くには、そんなに時間は要らなかった。

「君には期待しているからね。」

最終面談を終え、別室で手を握った人事担当の男性は、就職した頃には既に会社に居なかった。退職したことを、入社してから先輩に聞いた。二十四歳だったあの男性も、今の私と同じように、疲れて、悩んで、そして現実から目を背けたのかもしれない。平均勤続年数三年。その理由が、なんとなく分かった気がする。頑張れるものだけが生き残る世界。現実を知るには、早すぎる気もする。

3の数字が危ない。新入社員研修で、専務が意気揚々と話していたことが思い出された。三ヶ月。まさに今、その瞬間。

“会社、辞めようかな。”

何度と繰り返したセリフ。今日も頭の中に巡るセリフが巡り、一日が終わる。

鍵を開けて家に入る。大学へ入学すると同時に始めた一人暮らし。誰もいないそこは、何か起きそうなくらい静かで暗くて、不気味だった。1LDKの間取りに惹かれて入居を決めたのに、リビングとキッチンで合わせて六畳。家賃の6万円と、釣り合っていない気さえする。一人で住むには十分だけれど、憧れだった広い部屋とは、程遠いマイホーム。

さっきコンビニで買ったご飯をレンジで温めている間に、シャワーを浴びる。疲れた体をお風呂に入れてやる気力も、全く残っていなかった。今日が木曜日であることが、唯一の救い。あと一日。そう言い聞かせて、頭からあのセリフを追い出すように、思いっきり蛇口をひねった。

“会社、辞めようかな。”

いつしかそれは“辞めたいな”になって、いつしかそれも“辞めよう”に変わる。シャワーの水力なんて、無意味だった。恵美は勝手に、限界を感じていた。そしていつの間にか、“限界”を口にしていた。

美味しくないとツナマヨ弁当を胃袋に流し込んで、半分はそのまま捨てた。食欲まで無くなってしまう。あらゆる欲が消えていく。あるとするなら、自由欲。

疲労というものを、ここまで重く感じたのは恵美にとっては初めての経験だった。就職をするということが、こんなに大変だとは、夢にも思わなかった。学生時代に続けていた居酒屋のバイトより、何倍も何十倍も、疲れることだった。

ベッドへ身体を投げ出すと、茶色の天井を見上げた。

「何でこんな会社入っちゃったんだろうな。」

口には出さないと決めていた弱音が、ついポロリとこぼれ出す。一度口にしたら、溜めすぎた湯船のお湯のように次から次に不満が溢れる。

「何で残業代もつかないのに、いつもこんなに遅くまで仕事なの？」

「何で新人だからって、コピー取りは全て私なの？」

「何で先輩は、いつも怒った感じなの？」

何で？何で？止まらない苛立ちを口にしたら、今度は目から冷たい水が溢れ出した。

“疲れてるのかな、私。”

恵美はそっと目を閉じた。

「ああ、あの頃に戻りたいな。」

リクルートスーツを着た自分を見る。電話を右手に、笑顔の恵美が居る。

「もしもし、お母さん！あのね、内定もらえたの！第一希望だよ。」

「良かったね！恵美！」

母の弾んだ声まで聞こえてくる。

“だめだよ。その会社に就職しちゃ、ダメなの。ダメなんだって。こんなに辛いんだよ。気付いてよ、馬鹿。”

疲れからくる過度な眠気と戦いながら、恵美は絵の中の自分に話しかけた。けれどそれは届かない声で、「私、がんばるから。」入社誓約書に判を押す両親の姿に変わっていただけだった。

そこで意識は途切れた。漂うように、恵美の意識は遠のいていった。

「おいで。」

声がある。男の人の声。誰？恵美は不審に思いながら、そっと目を開けた。

「お前、よく寝てたな。」

頭ら辺を触られているような、変な感触がする。一瞬では気付かなかったけれど、目に映るもの全てが異常に大きい。目を動かして周囲を見渡す。何かがおかしい。

“誰？”

声に出そうとして驚いた。自分の耳に届いたのは、「ミャオ？」という情けない音だったのだ。

「お、まだ腹減ってんの？」

恵美は混乱して、辺りを見渡してみた。転がったキャットフードの缶。一目散に駆け寄る猫が映るテレビのCMで見た、あのキャットフード。

「ミャーオ」

もう一度鳴いた後、とても情けなくなった。

そして恵美は理解した。理解したとは言い難い。でもなんとなく分かってしまった。何かが起きて、自分が猫になってしまった事を。

“大変だ。どうしよう。何で？どうして？”

恵美が混乱しているのも知らず、

「食うか。」

男の人が発泡スチロールでできた容器に、キャットフードを置いてくれる。隣には牛乳。全くお腹が空いていなかった。というより、人間であるはずの恵美が、キャットフードに抵抗を示すのも頷ける。

「いらないの？」

男の人がまた、頭ら辺を撫でた。

“食べなきゃ悲しむよね。”

恵美は、母親から常々聞かされていた「人の好意を踏みにじるな」を教訓に「ありがとう」を告げた。

「ミャン」

耳に届く不快な声。そして、舌にまとわりつくキャットフードの味。ちょっと腐った魚のような味。もっとも腐った魚を食べたことはないけれど。

「お前、どこから来た？」

男の人を見上げる。長い間見つめてみた。どこかでみたことあるような……。恵美は、はっと思い出した。そうだ。さっき、コンビニで、子猫が駆け寄ったあの男の人だ。

「ミャオ」

少し掠れたこの声は、あの子猫のものだったのだ。そうだ、鏡……。鏡ないのかな。恵美は、猫になって初めて歩き出した。歩くスピードは人間より遅い。全てが人間より小さいのだから当たり前だ。でも、少しだけ前に重心をかけると、物凄いスピードで走れることがわかった。なんとなく楽しくて、恵美は駆け回った。何かにぶつかっても、それ程痛くないし、何より見るもの全てが大きいことに、驚いて、そして刺激的だった。

「おい！危ないぞ！」

男の人の声を聞かずに、走りに走って、ようやく鏡を見つけた。トイレの傍の洗面台に備え付けられた小さな鏡。ジャンプして、自分の姿を確認した。“やっぱり。”思った通りだった。鏡に映った恵美は、コンビニで会ったあの小さな猫、そのものだった。白に少しだけ茶色が混ざった、あの雑種。

例えば私が猫だったら。そんな風に考えた。そしてそれが現実になった。恵美は混乱したまま、

「ミャーオ、ミャーオ、ミャーオ」

と三回鳴いた。

それに気付いた男の人は、恵美猫の姿を確認すると、

「捕まえた！」

そう言って、軽々と胸の位置まで持ち上げた。なんだか、とても安心する暖かさだ。男の人の胸に顔を埋めてみた。

「かわいいな、お前。俺の名前は、草木真一。二十一歳。ただいま就職活動中。って、猫に言っても仕方ないか。お前、名前は？」

“麻田恵美。二十二歳。”その答えははもちろん届かずに、「ミャオ」になって草木真一の元へ届いた。

「そうか、ミャオか。でもミャオって呼びにくいな。うーん・・・マオにするか。よし、今日からお前の名前はマオだ。わかったか、マオ。」

真一の笑い声に嫌だなんて言えるはずもなく、恵美は仕方なく、猫語で返事をした。

「ミャーオ。」

そして、また真一の胸の中で目を閉じると、一瞬で眠りにおちた。頭を優しく撫でる真一の手のぬくもりを、いつまでもいつまでも感じながら。

目が覚めても、恵美はマオのままだった。

「おはよう、マオ。」

真一が起きて、マオの頭を撫でる。

「ミャーオ」

大きな声で挨拶をする。

「元気になったな。」

そう言って、どこかへ行ってしまふ。不安になって、真一の後ろをトコトコ歩いた。

「シャワーだよ。」

その声を聞いて、安心し、真一が寝ていた布団の上に戻った。途中、昨日教えてもらった、トイレに寄った。以前猫でも飼っていたのか、真一の家には立派な猫のトイレが置いてあった。

キャットフードも山積みで、爪とぎもちゃんとある。

真一が戻ってきた。何だかすごく甘えたい気分だった。こうして男の人に甘えるのも、随分久しぶりなような気がする。一年前の就職活動の多忙から、恋人と別れて以来の。頭を真一の足に当てる。ねえ、遊ぼう。ねえ、遊ぼう。

真一は、マオの頭を軽く撫でて、

「あとでな。」

と言い残し、身支度を始めた。マオなんて初めから居なかったかのように。

着こなせないリクルートスーツ姿で玄関にたった真一は、一度だけ振り返った。

「行ってきます。」

最高の笑顔で扉を開ける真一の姿を、マオは見上げる以外に出来なかった。

“そっか。仕事、行かなくていいんだ。”

思いもよらない休日に、恵美の心は一瞬にして晴れ渡った。

猫の姿を借りたまま、気ままに歩く。真一が住んでいる1Rのアパートは、男のわりには、外観もインテリアも女趣味だ。マオは、宝探しでもするかのように隅から隅まで歩き続けた。途中で疲れたら、フローリングに腹をつけてうつ伏せになる。一瞬にして、体温が冷え、最高に心地良い瞬間を手に入れることができる。

“猫っていいな。”

恵美は、本気で考えていた。このまま、戻らなかったとしても、それはそれで幸せかもしれない・・・と。そしてそのまま、眠りに落ちた。

猫になってから、何時間でも寝ていられる。眠くて仕方ないわけではなく、目を閉じれば一瞬にして、遠い世界へ飛ぶことができるのだ。それはとても幸せで、ここ何ヶ月の恵美の生活には、考えられないようなプレゼントだった。

「ただいまー。」

真一の声がする。あれから何度もまどろみを繰り返し、外の景色が青から黒に変わる頃、真一は帰ってきた。

「ミャオ」

“おかえり”の代わりに鳴いてみる。独り言を言いながら、部屋へ向かう真一の足元に、頭をこすりつける。

「マオ、聞いて。俺、第一志望受かったかも。」

汗ばんで少し汚れたスーツをハンガーにかけながら、真一は言った。歩き出した真一の後ろについて、マオも歩く。部屋に着くとスラックスを脱いで、ジャージ姿になった真一は、マオを膝に乗せて続きを話し出した。

「今日人事の人に、期待してるって言われたんだ。俺だけ別室に呼ばれてさあ、握手までしたんだよ。すごいだろ？」

真一は心底嬉しそうに、今日の出来事を報告している。マオは、乗せられた膝の上のぬくもりを心地良く感じ、目を閉じたままそれを聞いていた。

何度も何度も背中を撫でてくれる。優しい真一の掌は、本当に温かくて、心地良かった。

「マオにまだ話してなかったよね。俺の第一志望。って、俺、なんで猫に話しかけてるんだ。」

真一は自問自答をして苦笑いを浮かべながら、続きを話し出した。

「アドステージーズって会社なんだ。」

マオは、それを聞いて、突然目を開けた。真一の膝の上で、身体を上手に回転させて、真一を見上げると、一度だけ鳴いた。

「ミャオ」

「結構でかい広告代理店でさあ。俺、そこに入るの憧れてたんだよ。大学の先輩も、何人か入ってるんだ。」

「ミャーオ」

小さく低い声が、喉の奥から漏れた。

“アドステージーズに入るのはダメ。体、ボロボロになっちゃうよ。”

恵美は、泣きたい気持ちになった。伝えたいことが、上手に伝えられない。言葉にならないもどかしさ。声に出して、言おうとするセリフは、音質が違う「音」。ただ、情けなく鳴くしかなかった。

アドステージーズこそ、恵美の体と心を蝕んだ、今は憎むべき会社なのだ。

真一と出逢ったのは、偶然。恵美が猫になったのは、奇跡。そして同じ会社に就職すること、それを運命と呼んで良いのか、恵美は困惑していた。

そんな恵美の気持ちを無視して、真一は話を続けた。

「俺さ、就職したらやりたいことがたくさんあるんだ。人事担当者と仲良くなって、より良い人材採用の手伝いができるって、すごくやりがいあると思わない？」

真一の声は弾んでいる。マオはただ見つめるか、相槌を打つように鳴くしかできなかった。

“私も、思った。こんなやりがいある仕事他にはないって。それに女の人でも、平等に評価される会社に引かれたんだ……。”

「学生の時って、これからの人生どうなるかわからないからさ。例えば、そんな悩める学生の相談にも乗ってあげたい。」

“うん、わかるよ。だからこそ、真一に伝えたいんだ。もっと、ちゃんと選ばなきゃダメだって。”

「営業職だから、やっぱり残業が凄かったりとか、それなりに辛いと思うんだ。でも、俺、頑張れそうな気がするんだ。好きな仕事に就けたら、頑張れそうだよ。」

まるで自分を見ているようだった。意気揚々と、これからの未来に幸せを描いていたあの頃を。リクルートスーツに身を纏った、去年の自分を。

しばらく沈黙が続いて、真一はただただマオの身体を撫で続けた。

「次の最終面談。マオ、俺、受かるかなあ。」

さっきまでの爛々とした輝きは、いつの間にか消えて、真一が小さく呟いた。その声は、頼りなくて、不安の色を隠すことが出来ない、そんな消えそうな声だった。

震える真一の声を、恵美は心から愛しいと思った。それは恋の始まりに似ていて、淡く優しい想いだった。

“大丈夫、受かるよ。”

さっきまでの否定的な意見はつの間にか消えていた。真一を元気付けたい、その一心で、何度も鳴いた。

例え辛い未来が待っているのが分かっているとしても、真一がアドステージーズに就職することを望んでいるなら、心の底から応援してあげたい。淡く優しい想いは、大きな火花となった。けれど恵美に成すべきことはなく、マオの姿を借りたまま右手の甲を優しく舐めるのが精一杯だった。

“大丈夫、大丈夫”

伝えたくて、でも言葉に出来ない代わりに。左手の甲に頬擦りをして。マオは優しく鳴いた。

「ミャーオ」

「マオ、ありがとな。」

真一の声は、まだ震えていた。

「寝るか。」

真一はシャワーを浴びるために立ち上がり、背中を向けた。真一の背中を見ながら、恵美はずっと考えていた。真一の姿と、今の自分を重ね合わせ、ずっと考えていた。

あの頃描いていた気持ち。辛くても頑張れる、それは恵美が抱いた気持ちと全く同じだった。就職という人生の岐路に立った時、憧れだったキャリアウーマンになれた時、初めて営業に出て

取引が成功した時。「辛くても頑張れる。」そう思ってきたのに。

真一の言葉は、恵美の胸に突き刺さった。

“好きな仕事に就けたら、頑張れそうだよ。”

マオは大きく背伸びをして、踵を返すと、先に真一のベッドの上に飛び乗った。思いっきり身体を伸ばし、大きな声で鳴いた後、真一の生活音を子守唄に、目を閉じた。

「マオ、寝たのか。」

隣で聞こえるはずの真一の声が、遠くに聞こえた。

目を開ける。真一の姿を確認しようとして、恵美は驚いた。

恵美が見たのは、隣にいる真一ではなかった。ちょうど天井から、全てを見下ろしているかのように、真一とマオが横たわっているベッドが見える。

真一の左手が、マオの身体を包み込んで、マオは優しく目を閉じたままだった。

不思議な感覚だった。さっきまで猫になっていた恵美は、今度は“無”になって空気を漂っているのだ。ここに居ることを伝えても、声も出ない。もちろん姿だって、見えるはずもない。

“これから一体どうなるんだろう・・・”

見えない自分の姿と、下に見える光景に、不安を覚えながら恵美がひたすら漂っていると、部屋中に聞き覚えのないメロディが溢れ出した。

真一はベッドの上に無造作に置かれた携帯電話に手を伸ばすと、画面を一瞬見つめた後、ゆっくりと親指を動かした。

「はい。」

いつもの真一より、低い声。

「何？」

冷たく言い放つ真一。相手は誰だろう。恵美は電話の向こうを想像した。

「もう、終わったんだろ？会ってどうするの？好きな人が出来たって、お前が言ったんだろ。」

明らかに不機嫌だ。少し怒っているようにも聞こえる。好きな人が出来た・・・の言葉で、恵美は悟った。モトカノ。

「俺はもう会わないって決めたの。」

少しも抑揚のない声で、真一は次々に言葉を吐き出す。

「うん。わかった。」

「じゃあ近いうちに送っとくよ。お前も元気で。」

真一は短い電話を切って、一呼吸ついたあと、マオに向かって話し始めた。マオは眠い目を少しだけ開けて、聞いている。

「モトカノだよ。荷物、送って欲しいって。勝手に出て行ったのに。ホント勝手だよな。」

そして深いため息を吐いた。恵美には分かる。そのため息に、“未練”が含まれていることを。恵美もそうだったから。

「ミャーオ。」

マオが頭を真一につける。何度も何度も。恵美がマオの身体を借りて、そうしていたみたいに。

その光景を見ていると、急に胸が苦しくなった。恵美は、無いはずの左手で、無いはずの自分

の胸に手を当てた。鼓動が聞こえる。ドクドク、ドクドク。血液が流れるそれは、恋の音。

マオが触れる肌を羨ましく思った。

例えば私が猫だったら、まだ真一の肌に身体をつけて、その大きな掌で背中を撫でてもらえただろう。

例えば私が猫だったら、ずっと傍にいられるのに。そして真一の今を励ましてあげられるのに。

恵美は真一に近づいて、数ミリの距離まで詰め寄った。“無”である恵美に気付くわけもなく、真一はマオと体を合わせて眠りにつこうとしている。

あと少し。

顔を近づけて、真一の唇に無いはずの唇を合わせた。けれど、やっぱり何も感じなくて、触れたはずの唇の感触も、触ってみた肌の感触も、全く何も感じなかった。

ふと涙がこぼれた。“無”になった姿でも、涙はこぼれるんだ。冷たい水を頬に感じて、目を閉じた。

真一を想って、静かに目を閉じた。

「恵美！恵美！」

耳元に女の人の声が聞こえる。それは、とても懐かしく、とても聞きたかった声だった。目を開けて、その誰かを確認した。蛍光灯が眩しい部屋に、ぼんやりと浮かぶのは、母だった。

「お母さん。」

言葉に出して母親の存在を確認するのが精一杯だった。

「やっと起きた？あんた、高熱出して大変だったんだよ。佐々木さんが連絡くれてね。佐々木さんってあんたの上司？いい人だね。出勤のはずなのに、連絡もないし、来てみたら、チャイム押しても出ない。で、心配になって、大家さんに鍵開けてもらったんだってさ。そしたらあんた、高熱だしてうなされてて。佐々木さん、とりあえず携帯から電話くれたんだよ。おかあさん、慌てて家飛び出して来ちゃったよ。あんた全然起きないんだもん。もう夜になっちゃったわよ。もったいない。」

聞いてもいないのに、母は一人で一部始終を話して、豪快に笑った。懐かしい笑い声だった。

佐々木さんは同じ営業部で、十歳も歳が離れているせいか、恵美のことを妹のように可愛がってくれていた。

「佐々木さんいい人ね。ところで、富山と愛知って近そうで以外と遠いのね。4時間もかかっちゃったよ。」

指で数字の4を表して、母は喋り続ける。

「お母さん。ありがとう。」

まだ本調子になっていない体を無理やり起こして、とりあえず母に礼を言う。

「休んでなよ。土日もここにいるからさ。」

母は恵美の額に手をやって、熱を確認した。

「熱、下がったみたいね。待ってて。」

そう言って、台所へと歩き出した。

突然の母の存在に恵美は困惑していた。その割に嬉しくもあり、自然と笑みがこぼれ出す。

「お待たせ。」

作り置きしてくれていたのか、母は左手に茶碗を持って、すぐに戻ってきた。

「食べられる？」

「うん。」

母がくれたそれは、熱を出すと、母が必ず作ってくれた懐かしい卵粥だった。一日何も食べていないせいか、ただ懐かしかったからか、母のくれた卵粥は、ここ最近食べた物の中で一番美味しかった。

「ところでさ、あんた、仕事きついのか？」

愚痴なんて言っていないのに、母が唐突に口にした。

「どうして？」

「あんたが熱出すなんて、珍しいなって。」

「元気だけが取り柄だったもんね。」

恵美は母の勘の鋭さに驚いた。

「富山、戻ってきたら？」

恵美の表情を伺うように、母が尋ねる。恵美は弱っていた心が、一瞬ぐらつきそうになるのを

感じた。その時、心と脳裏に真一の姿がよぎった。

「好きで選んだ仕事だもん。大丈夫。」

母に心配かけないように、言葉を選んで告げた。無理を言って、愛知に就職したのは私。富山にも、働き口はたくさんある。母も父も、何度も恵美に諭したのに、恵美は聞く耳を持たないまま、アドステージーズに就職したのだ。あの時喜んでくれた母の胸には、心配の渦も巻いていたのだろう。今になって、母の気持ちを汲み取って、心から感謝の気持ちが溢れ出した。

「お母さん、本当にありがとね。」

「何もしてないわ。辛くなったらいつでも戻っておいで。あんたの部屋は、片付けてないからね。」

「結婚しちゃったらどうするの？」

「そしたら片付けせんとね。相手いるの？」

「好きな人なら。」

「どんな人？」

「秘密。でも、掌の温度が凄く温かい人。」

恵美の脳裏には、真一の姿が過ぎていた。好きだって言葉にしたら、急に恥ずかしくなった。

「そんな人、夏になったら手も握れんね。」

母が言うと、二人に笑いがこぼれた。豪快に笑う母の声と、恵美の笑い声が重なった。年を取るにつれて、似てきたように思う。

「親子だもの、当然だわ。」

母は言う。

「似るの、やだよ。」

恵美が言うと、また笑い声が重なった。

その日、熱が下がった恵美は長い間母と語りあった。父と母の恋のこと。母が始めて就職したミシンメーカーでのイジメの話。そして恵美を産んだ朝の話。一人しか産めず、寂しい想いをさせてごめんと母は詫びた。

シングルベッドに二人並んで夜を過ごした。大きかった母が、ここ最近痩せてしまったのを感じた。少しずつ小さくなって行く母を想った。五十を目前に控えた母。恵美は急に甘えたくなった。

「ねえ、お母さん、子守唄歌って。」

「何言ってるの。」

母は満更でもないように、少し笑った。

「じゃあさ、お腹撫でて。」

「困った子ねえ。」

そう言って、母は恵美のお腹に手を当てた。

「あんた、これ好きだったよねえ。いつも、こうしてあげるとすぐに寝付いてくれて、本当に手がかからない子だったわ。」

「うん。お母さんの手、暖かくて好きなんだ。」

何十年ぶりの母の掌。暖かくて心地良い。真一がくれた掌のぬくもりと、同じように。

「お母さん、私、仕事頑張るね。」

「頑張らなくてもいいわ。ほどほどにね。あんたには、帰る場所があるんだから。」

「うん。ありがとう。おやすみ。」

「おやすみ。」

誰かにおやすみを言うのも、久しぶりだった。母が来てくれたこと。猫になって、自由を感じたこと。最高のプレゼントを二度ももらった気がした。神様がくれたご褒美かもしれないと、恵美は思った。とても優しい気持ちのまま、恵美は再び眠りについた。

休日は、母と一緒に過ごした。愛知に来るのは、二度目だという母を、観光に連れ出した。

「体はもう大丈夫なの？」

母は心配したが、恵美の体調は万全だった。

「平気、平気。行こう。」

電車に乗って、市街へ出掛ける。歩きながら、住んでいる街の説明をした。高いビルを目にして、母は感嘆な言葉を繋げ、娘が居る街を誇らしげに思っていた。

日曜の夜、最後にデパートに寄った。母にプレゼントをするためだ。

「要らないよ、そんな大層な物。」

「いいじゃん。たまには。」

断る母に、恵美は言う。選んだのは、バーバリーのキーケース。母のくたびれたキーホルダーを見て、思い付いたプレゼントだった。父にはバーバリーの小銭入れを買った。二つで五万近くの出費なのに、全然痛くもなかった。大事な人に使うお金が、これ程気持ち良いものだとは、今の今まで分からなかった。

夕食には、母がリクエストした“ひつまぶし”をご馳走した。うなぎの匂いを前に、キーケースを差し出す。と、同時に恵美の家の合鍵も差し出した。

「また、何かあったらよろしくね。」

「もう呼び出しなんて懲り懲りだよ。」

そう言いながらも、母は柔らかい表情を浮かべていた。

“ひつまぶし”に、だし汁をかけることを躊躇いながらも、美味しそうに頬張る母の姿を見て、恵美は淀んでいた心が完全に晴れ渡って行くのを感じた。

「そろそろ行こうかね。」

母が立ち上がる。会計を終えて、駅のホームへ向かった。さっきまでの軽快な足取りとは打って変わって、まるで地面と靴が見えない磁力で引き寄せられるみたいに重い。

切符を買う母の後ろ姿を見つめる。さよならの瞬間が近づいている。

改札の前に立つと、母は言った

「元気でね。なんかあったらいつでも、富山に戻ってくるんだよ。」

母は手を差し出した。暖かい掌を感じたら、ふいに涙がこぼれた。

「恵美は、本当に泣き虫だねえ。」

母は笑いながら、目を赤くしていた。

「仕事頑張って、休みになったら、またすぐ帰るから。」

恵美はそういうのが精一杯だった。

「あんたの悪い癖だ。何事も頑張りすぎる。もっと手抜いて、緩やかに生きなさい。」

母は静かにそういうと、自分も目を赤くした。恵美の返事を待つ前に、手を離してしっかりと恵美を見据えて言った。

「じゃあ、私は行くね。」

「うん。バイバイ。お父さんにも、よろしくね。」

母が頷くのを見て、恵美は軽く手を上げた。母も軽く手を上げて、背中を向けて歩き出した。恵美は母の背中が見えなくなるまで、その場に立ち尽くしていた。

“緩やかに生きなさい”

母の声が聞こえた気がした。

また新しい朝が来た。母がいなくなった一人の部屋で、恵美は目を覚ました。体調は万全だ。月曜日の朝は気が重い。けれど、今日の恵美は、気分良く起きることができた。

恵美は起き上がり、自分の姿をまじまじと見つめた。掌、足、体にも触る。目に映ったそれは、全て黄色で、確かに人間の肌だった。

金曜日から日曜日のたった三日間で経験したこと。まるで嘘みたいな時間だった。マオの姿を借りたことも、母がここに居たことも。

とても静かな朝だった。

恵美はパジャマ姿のままカーテンを開けると、日差しを浴びて思いっきり深呼吸した。いつものようにシャワーを浴びて、支度を始める。シャワーを浴びながら、確かに脳裏に焼きついている真一の姿、そしてマオになった自分の姿を思い起こしていた。

シャワーから上がると、ふと最後の真一の言葉を思い出した。

「次の最終面談。なあマオ、俺、受かるかなあ。」

真一は確かにそう言った。母が来てくれたおかげで気が紛れていたが、真一に「もう一度会いたい」と恵美は考えていた。ずっと考えていたのだった。

恵美はメイク道具を取り出して、いつもより十分長い化粧をした。ライナーを二重に引いて、少しでも目を大きく見せようとした。アイシャドウは普段使わないピンクのグラデーション。マスカラの下地も使って、長い偽者のまつげを作る。真一のことを想いながら。微かな可能性を信じながら。

もしも会えたら。そんな願いを信じて。

7時を告げる針を確認して、恵美は家を出た。

久しぶりに期待が持てる朝だった。会社へ行くのが待ち遠しい朝だった。15分の満員電車も苦じゃなくなるくらいに。

「おはようございます。」

いつもより明るく挨拶をした。たくさんの「おはよう」が交わされる朝が嫌でたまらなかったのに。不思議だった。自分がこんなにも明るい気持ちになれるなんて。

「おー、麻田、元気になったか。」

佐々木さんが前から恵美の姿を見つけて、声を掛けて来た。

「佐々木さん！本当にご迷惑お掛けしました。」

会釈と同時に、お詫びの言葉を言うと、いつもと変わらない屈託ない笑顔で佐々木さんは笑った。

「無断欠勤なんて、麻田らしくないしな。行ってみたら鍵もかかったままだし。もしかしたらと思って、大家さん呼んで開けてもらったら、すげえ辛そうな顔でうなってるんだぜ。そりゃ、母親でも呼ぶよ、普通。お前に男がいたら、そっち呼んだけど、生憎だもんな。」

「男がいなくて生憎でした。でも、おかげ様で元気になりました！」

恵美は元気になった姿をアピールして、佐々木さんに軽く会釈した。

「おう。んじゃあ、今日も仕事頑張れよ。今日くらいは、契約、取ってきてくれよ。」

「はい。」

会話を終えて、別々の方向へ歩き出した。

佐々木さんに対して、恋心は全くない。けれど、今回の事でまた一つ敬うべき項目が出来た。母が言うように、佐々木さんはいい人なのだ。

いつも通り朝礼を終え、朝のミーティングを済ませる。ミーティングが終わると、事務の子がまず席に着く。パソコンを前に、キーボードの音が鳴り響く。キーボードを叩くのが苦手な恵美は、事務の子を密かに尊敬してしいた。

恵美は真一を想って、期待を最高潮に膨らませていた。

営業職でチームを組んでいる近藤先輩の後に続いて、外に出た。二つ上の近藤先輩は、無口でそして怖い。すぐに怒鳴るように物を言うから、恵美は苦手だった。それも理由で、心が病んでしまったと言っても過言ではない。

少しだけ気持ちが重くなって、そのまま社用車へ向かい、歩き出したその時だった。

「おはようございます。」

男の人の声が、恵美の耳に届いた。ふと顔をあげる。

「あっ。」

短く声にしてしまった。信じられない気持ちでいっぱいだった。恵美は言葉を返すことができないまま、男の人と、車に乗り込む寸前の先輩の姿を交互に目で追った。

「私、〇〇大学の草木真一と申します。最終面談に来ました。」

真一が居た。夢で会った通りの格好、声で、真一が恵美に向かって早口に言った。恵美はただ呆然と立ち尽くすだけだった。

近藤先輩が車の窓を開けて、恵美を呼ぶ。

「麻田、先行くぞ！」

「すぐ行きます！」

近藤先輩の声で我に返った恵美は、真一と向き合うと話し出した。

「初めまして。私、麻田恵美と言います。」

あの時出来なかった自己紹介。そして、続けて聞いた。

「突然だけど草木君、猫飼ってる？」

真一は、質問の意図が分からない様子で、それでもはっきり答えてくれた。

「はい。今ので二匹目です。少し前にコンビニで拾いました。前のヤツは、別れた彼女が持って行っちゃって。」

“知ってる。”

心の中で呟いた。現実だ。恵美が熱にうなされている間、魂だけが抜け出して、あの子猫の元へ飛んでいたのだ。夢のような本当の話。きっと本当の話だったのだ。

恵美は胸がドキドキするのを感じた。恋の始まりのその音だ。

「そう。その猫、名前何ていうの？」

答えも知っている。『マオ』真一が私にくれた名前だ。

「泣き声が、ミャオなんでマオです。単純ですか？」

そう言って笑った。恵美もつられて笑っていた。マオの頭を、背中をひたすら優しく撫でる真一の掌を思い出した。初めて会話をした。初めて目線を合わすことが出来た。

「そうなんだ。いい名前だね。」

恵美の言葉に真一は、心から嬉しそうに返事をした。

「はい。マオも喜ぶと思います。ところで、どこかでお会いしませんでした？」

真一は遠慮深く聞いた。

「ううん。多分初対面。」

恵美は、言葉を濁して右手を差し出した。真一も右手をくれた。繋いだ手のぬくもりは、あの時背中に感じたぬくもりと同じ温かさだった。

「草木君、面接頑張ってるね！絶対受かって。好きな仕事なら頑張れるんでしょ？」

真一は狐につままれたような顔をして立ち尽くしたあと、思い出したように声にした。

「はいっ！俺、好きな仕事なら頑張れると思うんですよ、辛くても。だから頑張ります。」

と大きく言った。

「来年、また会おうね。私もそれまで、どんなに辛いことがあっても頑張るから。」

恵美が手を離すと同時に、背中に近藤先輩の声がもう一度聞こえた。

「麻田、早くしろよ。」

恵美は真一に頭を下げて、振り返って走り出した。

「なんかいいことあったのか？」

車を走らせながら先輩が聞く。恵美は真一の姿を思い浮かべて、同じ言葉を告げた。

「好きな仕事に就けたら、頑張れると思うんですよ、私も。」

先輩は呆気にとられ大きな声で笑った。

「どうしたんだ、急に。」

「あの子が言ってたんです。」

「あの子って？」

「さっき、私が喋っていたあの子ですよ、男の子。」

先輩は、苦い顔をして考え込むような仕草をした後、そっと言った。

「誰もいなかったぞ。」

「え？」

「頭、いかれちゃったか。」

近藤先輩が茶化すように笑った。

恵美はそれ以上言葉を探せなかった。先輩の笑い声を右側に聞きながら、昨日までの3日間を思い返していた。

目が覚めると自分は確かに猫になっていた。鏡に映ったあの姿、肌で感じたフローリングの冷たさ、そして真一の言葉、掌のぬくもり。全て確かに覚えている。

真一を想った恋心、モトカノからの電話に勝手に嫉妬した感情も、全て確かにこの胸にある。そして母が来てくれた。高熱でうなされていた記憶は、全く無かったけれど。母はただそこにいて、優しい言葉と、少しカサカサした掌でお腹を撫でてくれた。それも全て確かに覚えているのに。

真一はそこに居なかった。マオも居なかった？恵美の頭は混乱していた。多分今までで一番。現実と夢の世界との折り合いが、全くつかない。そんな状態だった。

母のことを想った。母は本当に居たのだろうか。帰ったら電話してみよう。そんなことを考えて、ただ呆然と前だけを見つめていた。

恵美は頭の中をグルグルと回転させ、全ての折り合いをつけようと必死で、考える作業を続けていた。

そんな恵美の横で、鼻歌交じりに運転を続ける近藤先輩が口を開いた。

「なあ麻田、聞いたか。そういえば、うちの試験受けていた男の子、先週の金曜日にな、事故して死んだらしいぞ。次が最終面談で、内定も実は決まっていたんだってさ。残念だよな、全く。」

「え？・・・その人、名前なんて言うんですか？」

「草木なんちゃら。忘れちゃったよ。でも、ホント、人間の運命って残酷だよな。一瞬にして、全てが終わる。」

「草木真一？」

「おう、そうだ。草木真一。佐々木さんのお気に入りだったんだって。将来有望で期待されていたのにな。って、お前何で名前知ってるんだ？」

言葉を探してようやく告げた。

「会ったことがあるんです。」

全ての辻褄が合った気がした。

例えば猫になったら。そんな事を想っていた、罰なのか褒美なのか。

猫になって、真一がたくさんのぬくもりをくれた。頭を、背中を撫でて優しく笑ってくれた。そんな真一に恋をした。短くて淡い恋をしたのだ。

そのまま幸せを感じて、あっちの世界に行かないように、きっと母が現実に戻してくれたのだ。暖かい掌で、真一と同じような、たくさんのぬくもりと共に。

生と死の狭間で、恵美は二つのぬくもりを感じた。

そして真一が最後に会いに来てくれたこと。もう二度と会えないことを改めて知った時、今まで感じたことのない痛みを胸に感じた。

短くて淡い恋だった。恵美の目には、暖かい涙が溢れんばかりに揺らいでいた。